

# 『マクベス評釈』 の緒言

映画文学人生論

坪内逍遙 (1859-1931)

『小説神髓』 1(885)

『沙翁全集 全四十冊』 (1909-19280)

参考：松尾芭蕉『笈の小文』 (1709+)

小田島雄志訳『マクベス』(1983)「白水社」

造化の本体は無心なるべし。さてシェークスピアの傑作は、頗る此の造化に似たり。

学生時代、原書講読の授業で、沙翁の『マクベス』がテキストに選ばれたことがある。私は最初の二、三回は受講したが、やがてバカの壁につきあたり、ドロップアウトしてしまった。

我が青春に悔いあり。その悔いの一つは『マクベス』の未読である。しかし、高齢者になってから思い直し、『マクベス』の原文を一言一句、パソコンに印字してみた。その後で小田島雄志訳を読んで、感想を書けば、遅まきながら原書講読の単位を修得したことになる。

ついでに坪内逍遙訳の『沙翁全集』全四十冊も図書館で探したが、見つからない。その代わり、『マクベス評釈』の緒言』という逍遙の論文を見つけたので、この論文を読んでみた。

「シェークスピアの作は甚だ自然に似たり」と逍遙は述べている。沙翁の作は作者の理想を読者に押しつけるものではなく、読む者の心にて如何ようにも解釈できるものだという。

「人々試みに自然といふものを観よ。心を虚平にして観れば、自然は只、自然にして、善悪のいづれにも偏りたるとは見えぬ。固より意地わるき継母の如きものとも見えねば、慈母とも見えぬ。然るに、数奇失意の人は造化を怨み、自然を憤りて、此の世を穢土と罵り。苦界と非るなり」。

この考えは、逍遙の『小説神髓』にも反映され



映画文学人生論

## 『マクベス評釈』 緒言

ているが、さらに田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥らの自然主義文学の思想にもつながっている。

意外なことに、自然主義文学はシェークスピアが元祖で、『マクベス』や『ハムレット』（例…演技とは、自然を鏡に写し出すことだ——第三幕第二場）は自然主義文学のはしりかもしれない。

また、逍遙の造化という言葉に注目すると、沙翁は芭蕉ともつながる。

「造化の本体は無心なるべし。さてシェークスピアの傑作は、頗る此の造化に似たり」と坪内逍遙はいう。この見解から連想されるのは芭蕉『笈の小文』の有名な文章である。「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の絵に於ける、利休が茶における、其の貫道する物は一（いつ）なり。しかも風雅におけるもの、造化に随ひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし」。

すると、沙翁の戯曲における物も西行の和歌や宗祇の連歌や雪舟の絵や利休の茶と貫道しているかもしれない。そして、その貫道する物は一のはずである。

というと、沙翁と蕉翁が一になり、まことに都合がよいが、そうは問屋がおろさないか。ミソとクソとを一緒にするなという声が諸方からあがってくるだろう。沙翁と蕉翁のどちらがミソで、どちらがクソかは、読者の心によってきまる。

この秋は何で年寄る鳥雲に

芭蕉